

「クリスマス、おめでとう」

2017年12月25日

クリスマス、おめでとうございます。今日は、主イエスのご降誕日、クリスマスである。クリスマスは「キリスト」と「マス」の合成語で、「マス」は祭、礼拝という意味で、クリスマスは「キリスト礼拝」を意味する。キリスト礼拝は、毎週、教会で捧げているが、代々の教会はクリスマスを主イエスのご降誕日を指す言葉として用いるようになった。この日が、史実としてのイエスの誕生日ではない。4世紀頃、ローマでは、太陽の日照時間が最も少なくなる冬至の頃に、太陽神の祭を行っていた。教会は太陽神の祭に対抗して、義の太陽、世の光として、25日をキリストのご降誕日にしたのである。

聖書では、主イエスのご降誕に関する最も古い記述は、54年頃、パウロがガラテヤ書4章4節で、「しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました」と書いている。70年頃、書かれたマルコ福音書には、主イエスのご降誕については全く書かれていない。80年代になって、マタイ、ルカ福音書は冒頭に主イエスのご降誕について書いている。時代が下がるにつれて、キリストの信者数は大きく増え、その信仰も篤くなっていった。そのような時代背景の中で、マタイ、ルカ福音書の著者たちはキリストのご降誕物語を創作し、福音書の初めに書き置いたのである。創作物語であるから、意味がないというのではない。主イエスの生涯を書くに当たり、ご降誕物語をプロローグとし、これを読めば、主イエスの生涯の本質・真髓が分かるようにと、書いたのである。ご降誕物語には真っ直ぐなキリスト告白が著されている。

ご降誕物語はベースに旧約聖書の預言の成就があり、当時の歴史的に実在した人物、生活環境を踏まえ、何より、著者たちの壮大なロマンと美しい想像力の広がりによって圧倒される。ページントで見る牧歌的な絵物語に、主イエスの福音が映し出されている。

マタイ福音書は、おとめマリアより生まれたのは人間の自然な関係を越えた聖霊の関与であった、それがインマヌエル(神は我々と共におられる)の救いの成就であると告げる。東方の占星術の学者たちは星にユダヤの王の誕生を示され、星に導かれて、幼子イエスにまみえ、贈り物を献げ、礼拝する。主イエスは、異邦人も礼拝する世界の王であると伝えている。彼らの礼拝に対比させ、実在したヘロデ大王の権力に執着する醜悪な姿を描き出している。どんな権力者も歴史の中で消えていくが、人間を救うために十字架で命を捧げたキリストは歴史を超えて、崇められている。

ルカ福音書は、幼子イエスは家畜小屋で生まれ、布にくるんで飼い葉桶に寝かされたと告げる。この主イエスのご降誕は最初に、野宿して働いている貧しい羊飼いたちに、天使から「あなたがたのために救い者がお生まれになった。この方こそ主メシアである」と知らされた。天の軍勢が夜空を赤々と焦がし、「いと高きところには神に栄光あれ、地には平和、御心に適う人にあれ」との大讃美があった。ご降誕物語の中で最も美しいシーンである。羊飼いたちは、天使の知らせを見ようとベツレヘムに行き、そこで、飼い葉桶に眠る主イエスにまみえ、最初のクリスマス・キリスト礼拝の栄誉に与る。

ご降誕物語は、無力で、弱い者の側で生まれ、生き、十字架で殺される主イエスを映し出す。そこに、人間の罪を赦し、神に贖われ、神と共に生きる救いがあると語っている。天使ガブリエルがマリアに告げた「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられ」という言葉を、主イエスを信じて、霊において御子を内に宿した「私」に語られた言葉として受け入れる。それが、今日のクリスマスの喜びである。